

Title	いのちの尊厳を確立するための対話：東アジア共同体形成の基礎づくりのために(朴成奎先生「生命の危機的時代にいのちの尊厳を確立するための神学的対案の模索」に対するコメント)
Author(s)	阿久戸, 光晴
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.59, 2015.3 : 55-58
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5490
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

【第四回日韓神学者学術会議】

朴成奎先生「生命の危機的時代に

いのちの尊厳を確立するための神学的対案の模索」に対するコメント

いのちの尊厳を確立するための対話

——東アジア共同体形成の基礎づくりのために——

阿久戸光晴

二〇一四年一月七日の第四回日韓神学者学術会議（聖学院大学会場）で、韓国長老会神学大学校の気鋭の朴成奎助教授の講演へのコメントとして、私は以下のとおり述べた。

朴助教授の真摯な講演原稿に敬意を表し、論旨を追いつつ、いくつかコメントを提示したい。

朴助教授はまず、前回の第三回神学者学術会議が「現代の苦難における闇の側面を熟考する場であつた」とするなら、今回の第四回神学者学術会議が「いのちの尊厳を確立するという、より肯定的な側面に照明を当てる場となる」と指摘された。現代は、精神的観点から見ると、肯定的側面と否定的側面という二つの顔があり、肯定的側面が医療技術などの科学技術文明による生活の利便性の進歩という楽観的見方を支える一方、否定的側面がいのちの脅威やその尊厳の喪失を前にしてもすれば無気力感や絶望感に陥りかねない現況を指摘する。そして今回の会議が、これら現代の根本課題

を日韓両国の神学者による協働的思索によつて克服する場となるよう、呼びかけられる。そしてこの課題は、日韓両国にとつて時宜になつているとする。日本では東日本大震災、韓国ではセウォル号の惨事があり、「いのちの尊厳」を神学的に基礎づける必要について訴えられる。そのうえで、朴助教授は「いのちの尊厳を脅かす諸要素」の分析から入り、「いのちの尊厳への感覚」の麻痺による人間性に対する脅威に他ならない。

「いのちの尊厳を脅かす諸要素」については、コンラート・ローレンツの「いのちの尊厳を脅かす精神的諸原因」の分析を基とする。すなわち、①人口過剰、②自然の荒廃、③技術発展による人間精神への圧迫、④世俗化、⑤遺伝的衰退、⑥伝統崩壊、⑦詰め込み教育、⑧核武装である。これらが、戦争や独裁体制による大虐殺、原発事故などの大量人命被害、強力ウイルスによる疾病の発症、自死の急増などを生んでいる。これらは、いずれも大衆化社会における「いのちの尊厳への感覚」の麻痺による人間性に対する脅威に他ならない。

「いのちの尊厳の神学的意味」について、朴助教授は物質的次元に位置づけられる「生」と異なる「いのち」を霊的次元に位置づけ、その基礎づけを旧新約聖書に求める。朴助教授によれば、「いのち」は神とのつながりにおける関係概念であり、新約聖書においてキリストの復活によつて開かれた救済に基礎づけられる。

そのうえで、朴助教授はカール・バルトの『教会教義学』第三巻「創造論」の「生への畏敬」の主張を引用しつつ、「いのちの尊厳の神学的対案」を展開する。すなわち、バルトが一九四八年の第一回WCCアムステルダム総会において「世界の無秩序と神の救済計画」という通常の課題を逆転させ、「神の救済計画と世界の無秩序」として論じたように、災難それ自体から始めるのではなく、神の救済計画という神の視点から災難や他の課題を論ずるよう主張する。

最後に「おわりに」として、永遠のいのちの正しい認識が希望の原動力となると、締めくくられる。

思うに、バルト神学を土台として立派にまとめられた論文であり、心から敬意を表する。そのうえで、下記のとおり五点ほど質問ないしコメントを提示したい。

第一に、言葉の定義の課題であるが、「命」と「いのち」の区別およびそれぞれの定義、また「尊厳」の意味を、いかにとらえておられるか、朴助教授のご見解を確かめたい。

第二に、バルト神学そのものへの根本的質問になるが、「神の救済計画」からの「世界の無秩序」への視点とは、具体的にどのようなものか、朴助教授のコメントを願いたい。というのは、神は人間世界に至るまで低きに下る神であり、それは十字架に至るまで世界の苦悩を背負うことを意味する。神の救済計画に参与するよう祈る私たち人間にとつては、やはり災難など「世界の無秩序」という現実に触発されて、苦しめる者と共に苦悩を共有する形でしか神学的思索を始められないものと思われるからである。日本の神学者北森嘉蔵は「神の痛み」を主張したが、それは「高きにまします神」でなく、「低きに下る神」の救済のわざである。微妙なニュアンスの差が実際の人間の行動を左右すると思われる。

第三に、朴助教授は「いのちの尊厳」の基礎づけをいかにされるか、さらなるコメントを願いたい。バルトは、類比‘Analogia’、という概念を持つてくると思われるが、イエス・キリストの復活のいのちから具体的な「類比」はどのように描かれるであろうか。ローレンツが分析する八つの精神的諸原因から「人間性およびいのちの尊厳」を守る防波堤を神学的に良く築けるであろうか、懸念を持つからである。

第四に、法と価値と歴史が、朴助教授のいのちの尊厳の確立にいかに関わるか、ご見解を伺いたい。日本はもちろんのこと、韓国でも無論全員がクリスチャンではない。すなわち、神学の対社会貢献として、神学テーゼの有効化は、実定法に現れると思われる。法を共通土壌とし、そこで神学は非キリスト教世界とも会話できると思われる。また人格、人権などの普遍的価値が、自然法概念や聖書の契約概念と相まって、法の条文に入り得ると思われる。また、価値の普遍性を保証するのは、歴史の荒波であろう。その意味で、論旨の補強としての、法・価値・歴史の諸概念について、対

話したく思われた次第である。

第五に、各論としての個別ケースとしての倫理である。東日本震災時およびその後における原発の安全管理の問題やセウォル号の船会社の経営方針や避難誘導の問題など、一般テーマだけで「いのちの尊厳」が十分守られるであろうか、具体的各論の倫理課題が残されているのではないか、朴助教授もいかが思われるであろうか。

真摯な論文展開には、真摯な協議を願ひ、率直なコメントを提示させていただいた。いずれにせよ、「命」と「いのち」が脅威にさらされている今日、社会生活に有効適切な神学テーマを、日韓の神学者協働により、展開したいと切望し、そのきっかけを提示してくださいました朴助教授に深甚なる感謝を申し上げます。

以上のように述べ、大変実り豊かな神学的ダイアログの場となった。東アジアの隣接諸国の外交関係が緊張をほらむ時に、このような学術的対話が将来へ向けての東アジア共同体形成の基礎づくりの一助となることを願う。